

清泉カトリック センター便り

第15号
平成27年
4月6日

【編集・発行 カトリックセンター】

今月のみことば

そして、人の子は三日目に
復活する。
(マタイ福音書 20章19節)

復活祭



「復活祭」は、十字架上で死んだイエスが復活したことを記念する祝日で、この日、キリスト信者たちは、「復活した主が、今も生きて、我々ともにある」という信仰宣言を新たにします。キリスト教の祝日の中では、クリスマス（降誕祭）がポピュラーですが、教会においては、降誕祭以上に重要な祝日が復活祭です。

復活祭は、カレンダー上に固定されていない移動祝日で、4世紀になって「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」に祝うことが定められ、今に至っています。今年は、4月5日でした。復活祭から後7週間は「復活節」と呼ばれ、次の大きな祝日「聖霊降臨の祝日」に続きます。

○卵とウサギ

「復活祭」は「イースター」とも呼ばれ、北半球の多くの国で、新緑の芽吹く春に祝われます。「イースター」という名前は、アングロサクソンの神話の中に出てくる春の女神「エイオストレ」から来ています。イエスの復活は「新しい命の誕生」としてイメージされることから、ヒヨコが生まれてくる「卵」、春にたくさん赤ちゃんを産む「ウサギ」がイースターのシンボルとして使われるようになりました。国によっては、卵を庭のあちこちに隠して、子供たちに探させたり、ウクライナでは、卵に芸術的な細かい模様を描いたり、ギリシャでは、染めた卵をぶつけ合ったりします。



ちょうど太陽の光が、杉の大木と同時に、小さな花の一つひとつを、まるでこの地上にはその花しかないかのように照らすのと同じで、主も一人ひとりに、まるで、その人以外だれもいないかのように、特別な心をお配りになります。

リジーの聖テレジア

「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言っている。悩むな・・・何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。(マタイ6: 31, 33)

私たちが生活のために働くのは当然のことですが、その為だけに精力を注ぎ、必要以上に心が囚われることが思い悩むこと、「思い煩い」です。実際「どんなに思い煩ったとて」私たちは自分の寿命を延ばすことができません。肝心の寿命が人間の意のままにならないのであれば、衣食住などの「その他のこと」を思い煩うのは愚かなことではないでしょうか。私たち人間としてなすべき努力をしたならば、後は主の配慮に信頼を持って任せたいです。

大事なものは「ただ神の国」で、それは神の愛が私たちの生活の中に実現するよう努めること、つまり、愛に満ちた「関わり合い」が私たちの間に現実となること、つまり「私たちが一人ひとりを心にかけて大切にしてください。主が私たち一人ひとりを心にかけて大切にしてください。私たちがこの主に信頼して不必要な心配は極力避けて生活したいです。」

そして、求めるべき大事なものは「ただ神の国」で、それは神の愛が私たちの生活の中に実現するよう努めること、つまり、愛に満ちた「関わり合い」が私たちの間に現実となることに他なりません。主が私たち一人ひとりを心にかけて大切にしてください。私たちがこの主に信頼して不必要な心配は極力避けて生活したいものです。

(文責 窪寺洋子)